

優秀賞

大学生部門

京都大学 大学院 2年

服部 実香

## 強情

昨日はさんざん泣いた。アイラインを太く引いても、腫れたまぶたの下へきれいに隠れてしまう。黒く殺風景なスーツを着、硬く四角い鞆を持って鏡に立てば、情けない自分の姿が映る。今日も会社説明会へ向かう。行きたくない。電車に乗ってしまえばやる気になるかもしれない。しかし乗ってみても、何も変わらなかった。窓の向こうから、強い日差しと木々の緑が飛び込んでくる。もうすっかり暑い季節だ。ニユースによれば、八割の学生はもう就職活動を終えたという。私のこの生活は、いつまで続くのだろう。

先週の面接官の、呆れ顔。自分の話が、求められるものとずれているのは分かっている。でも今の私には、それを話すしか仕方がなかった。この数年間、目の前の課題やアルバイトを、精一杯こなしてきた。それだけの学生だった。これといって立派な成績を残してはいないし、就職のためにしてきたことも特になかった。それなら売りにできる部分をひねり出せ。就職活動をよく知る人からはそう言われた。でも、そうしてひねり出した自分は、ぺらぺらの化けの皮を被った偽物に思える。魅力的なふりをする自分を想像するだけで、全身から力が抜ける。自分の濃度がどんどん薄くなって、殺風景なスーツや他の学生と一緒に溶けて、そのうちいなくなってしまう気がする。それがどうしても嫌だった。

今日の会社にも、どうせ上手く話せない。もう次の駅で降りて、引き返してしまおう。

電車に乗ってから、何度もそう考えた。でも、人の役に立っていたい、役割が欲しい。その気持ち、私の強情を捻じ伏せた。社会人として生きていくには、あの化けの皮が必要なかもしれない。今はそれを被るのが憎い。でも就職活動を続ければ、簡単に被れる日が来るかもしれない。もしくは、被らずにやっつけていける場所が、どこかに見つかるかもしれない。

涙を拭う。会場まで、あと二駅。